

## ちゅうごんのいえ

昭和の初め私達が中学校時代、上衣は極度に短くズボンの裾の物すごく太いのが流行った。今では全く逆で、上衣は長くズボンはむしろ細くなっている。

和牛も長い間にいろいろ変化しながら進歩して来ているが、殊にここ十数年位の間の変わりようは著しい。この変化を服装の流行と同日に論ずることは当を得ていないが、時代の変遷に即応して和牛が変化し、また変化しなければならぬということは、いつまでも変わらないと信じている。

昨秋真庭郡の畜産共進会を機に、かねがね行きたいと願っていた新庄村へ行くことができた。ここは昔から「新庄牛」の名で知られた良牛の産地であるだけに、共進会は和牛一色であり、出品牛の頭数といい質といい郡共進会としては相当充実したものだ。

往路勝山駅で汽車を捨ててバスに乗った。バスは小さい川にそって山狭の道路を登って行った。この地方の秋の訪れは早く9月中旬というのにはや秋色濃く、車窓から見る景色は平素雑事に追われて季節の移り変りに対する感受性のにぶっている私の眼に、いやでも秋が来たことを知らせた。

ボンヤリ窓外を眺めていると、路傍に点在する民家の門標に「忠魂の家」とあるのに気がついた。言うまでもなく太平洋戦争—大東亜戦争—に一家の支柱となる主人が、或は将来を囑望された若者が「君国のため」祖国に殉じたのを末長く銘記し感謝を表わすためである。私達の世代のものは誰でもあの戦争には感慨深いものがあると同時に早く忘れてしまいたい。十年一昔と言って、あれから10年以上経った今日、「戦後」という言葉がむしろ法度と

なっている位で、物事の考え方受取り方にも変化があつて、ウェットとドライの交錯する目まぐるしい世の中に変り、世は正に原子力時代に移ろうとして、すべてのものが一日も1カ所に停らない時代になっている。幾十年となく余り変化のない落附いたこの村で古めかしい構えの家に「忠魂の家」という標札が掲げてあつても或は何らおかしくないかも知れないが、車窓から見た瞬間何か時代錯誤のような感じがしたのは私の感覚の誤りだったろうか。

近年畜産の社会的地位は非常に高まって来て、その飛躍的な発展が期待されている。畜産で飯を食っている者として当然そうでなければならぬと意を強くしている。畜産の中でも殊に生活文化の向上のため酪農に託される望みは大きく、関係者の酪農振興への熱意は非常なものだ。ところがいかに社会的な環境が酪農の振興を要請しても、酪農にはこれが伸びるべきいろいろな根本的条件が備わっていないければならぬことが通念となっている。

現に美作集約酪農地域から美甘新庄が除外されているのを見てもなるほどと肯けるだろう。この地方の畜産は将来とも和牛を中心として栄えなければならぬ。ところがここで考えなければならぬと思うことは、和牛が旧態依然たる姿であつてはならないということだ。近代的な和牛の生産地帯として、大げさに表現すれば生れかわった気持で将来に対処することだ。「忠魂の家」式の感覚で過ぎ去った昔になぞみ感傷しては時代に取り残される。

日本人が米を主食とし、米をつくる農業から脱却する時代が訪れない限り畜産は農業のわき役であり、このような姿にある限り和牛はわが国の畜産の主役であり続けるだろう。和牛の責任は大きい。和

## 岡山畜産便り1957.01

牛は時代の要請を敏感に読み取って変革しなければならぬ。現に最近の和牛は役畜というよりも肉をつくるための牛として多分に用畜化していると思う。品種改良もこのような方向に向って行われつつある。

岡山県の和牛がいつまでも小格敏捷、粗食に耐えて頑健だとして満足してはいけぬ。早熟早肥で飼料の利用性のいい、資質も優れた近代的なものに脱皮しなければ時代に置き去りにされてしまう。美甘や新庄のような他にわずらわされることの少ない恵まれた環境にあつて、しかも古い伝統をもつ和牛地帯がこのような新しい感覚で和牛の改良増殖に対処することは、独り真庭郡とか岡山県とかいう狭い範囲からだけでなく、和牛全体の発展のために非常に大事なことだと思ふ。

新年に当つてもこの拙文を単なるウワゴトとして片づけてしまいたくないものだ。

— (はやし生) —